

アムスルだより

No. 131 2015年 1月10日



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@oki-zamami.jp



●波にゆられて一年間

ーイセエビ・セミエビの幼生ー

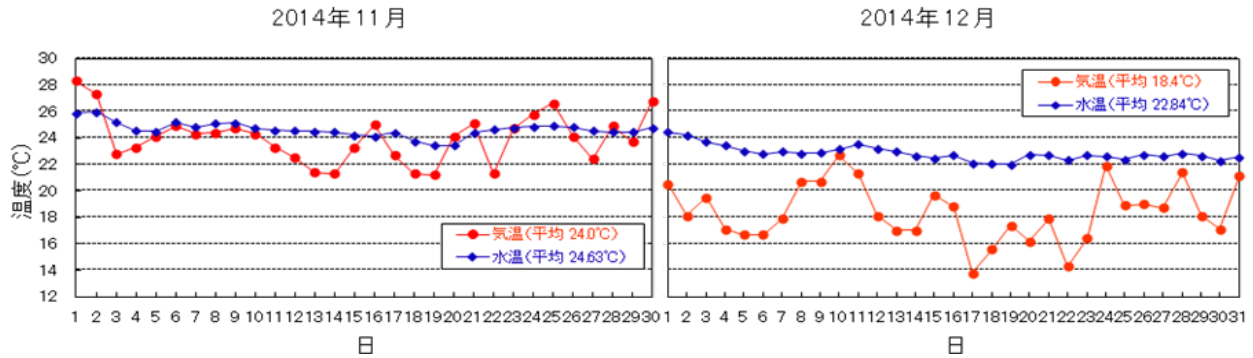
新年あけましておめでとうございます。去年のお正月は暖かくて過ごしやすかったのですが、今年は寒い元日でした。大みそかが 20℃をこえるくらい暖かかっただけに、風の冷たさが身にしみました。その後も暖かくなったり寒くなったりと落ち着かない気候ですが、みなさんは楽しいお正月だったのでしょうか。さて、今年初めてのアムスルだよりにどんな生き物を紹介しようかと思ったのですが、前回のイセエビについてもう少しお話ししたいことがありました。せっかくのお正月ですので、今回も引き続きおめでたいイセエビについてお話ししたいと思います。

日本では、イセエビ類は魚のタイと並んでおめでたい動物の代表ですし、食べ

てもその味が好きな人は少なくないと思います。また、それは日本だけでなく、世界の多くの国で好んで食べられています。つまり、イセエビ類は経済的に価値の高い水産資源と言えます。そこで、ずいぶん昔からそれを獲るだけでなく、養殖して増やせないかと考えられてきました。日本で、最初にイセエビ類の養殖がおこなわれたのは、1890年代のことです。今年は2015年ですから、もう115年以上も前のことになります。けれども、実はいまだに商売になるくらいにたくさんのイセエビ類を養殖することには成功していません。いったい何が問題なのでしょう。

一番の問題は、イセエビ類が生まれて間もない時期にあります。イセエビ類は、卵からかえるとまずフィロゾーマと呼ばれる幼生になります。冒頭に何やら変な形の怪物のような生き物の写真を載せましたが、これがそのフィロゾーマ幼生です（本当はこの写真はセミエビ類のフィロゾーマ幼生なのですが、イセエビ類の幼生も良く見ないとわからないくらいそっくりです）。フィロゾーマ幼生は、やがて次の段階のプエルルスという透明なエビの形の幼生となり、そして稚エビになって親と同じような暮らしを始めるといって一生を送るのですが、このフィロゾーマ幼生の時期が問題なのです。たとえば内地に多いいわゆるイセエビでは、ふ化直後のフィロゾーマは体長 1.5mm くら

定点観測



いで、脱皮を繰り返して 30mm ほどまで大きくなりますが、それには 10 ヶ月から 1 年という長い時間がかかるのです。おまけに、写真のとおり脚が長いので、飼育している時にフィロゾーマ同士がからみ合って、脚が取れるなどの被害が生じます。さらに困ったことに何をよく食べるのか、適当なエサもわかりませんでした。

それでも、多くの研究者が地道な実験を続け、1980 年代の終わり（研究が始まってからおよそ 90 年後）に、水質をきれいに保つこととエサを工夫することで、ようやく 2 つの実験所でそれぞれ 1 個体と 2 個体の稚エビを作ることに成功しました。その後も、飼育容器を回転させてフィロゾーマが底に集まるのを防いだり、飼育水をよりきれいに保つ工夫をするなどして、生き残りの数は確実に増えてきました。ですが、残念ながらいまだ店に出回るほどの数は生産できていません。

現在注目されているのは、エサの工夫です。イセエビ類やセミエビ類のフィロゾーマの消化管の中を調べたところ、いくつかの種でクラゲ類を食べているという証拠が見つかり、試しにセミエビ類のフィロゾーマにクラゲを食べさせて育てたところ、アサリを食べさせたものよりも早く次のニスト幼生になったという実験結果も報告されたのです。もしかしたら、クラゲ類をエサにすれば、早くたくさんの稚エビを育てることができるかもしれません。今後の研究が期待されます。

海の中にはたくさんの生き物がすんでいます。その中には飼育したり繁殖させたりするのが難しいものがたくさんいます。サンゴ類もそのなかの一つと言って良いでしょう。そうした生き物をふやすには、多くの人の努力と時間が必要なのです。見方を変えれば、こうした生き物が自然と生きて増えている海や山の環境がどれだけ貴重ですばらしいものかということがわかります。今年も、この生き物に満ちた慶良間の自然を未来につなげられるように努力していきたいと思えます。

● 阿嘉島の海より

去年は、慶良間諸島が国立公園に指定されるという大きな出来事がありました。そのためか、去年は島を訪れる観光客がとて多かつたように思います。特に、夏の時期には、日帰りで海水浴を楽しみに来られる人が増え、高速船やフェリーも連日満席状態でした。多くの人々が慶良間を訪れ、その美しい自然にふれてくれることはとてもよいことですが、その反面、今後はいろいろな問題も出てくるかもしれません。これからも慶良間の貴重な自然を守っていくために、島に住む我々も島を訪れる観光客のみなさんもみんな協力して、慶良間をすばらしい国立公園にしていきたいと思います。それでは、今年も一年よろしくお願ひします。

